

Specular microscopeにて観察する機会を得たので報告する。Specular microscopeにて撮影したフィルムを約560倍に拡大し、コンピューター画像処理システムにて解析を行なった。

症例1は25歳男性で、視力は左右共矯正で1.2、デスメ膜の深さに境界鮮明な小水疱が存在し、灰白色の地図状の反射に囲まれていた。症例2は62歳男性で、症例1の実父。視力は矯正で右0.9、左1.2であり、同様にデスメ膜の深さで、灰白色の地図状混濁が存在していた。症例3は25歳の男性で、矯正視力は両側1.2、症例1と同様の所見が認められた。以上をSpecular microscopeにて観察したところ、症例1と3に共通な所見として、加齢変化を上回る内皮細胞の拡大、形や配列の不正が認められた。vesicleに相当する部位は、cratorの様相を呈しており、その周囲の内皮細胞面積は、他の部位に比べて有意に大きかった ($p < 0.005$)。症例2では明らかに加齢化を上まわった拡大とはいえなかった。

本症は、1916年 Keppoe により報告され、Schlichting により確立された遺伝性の endothelial dystrophy である。細隙燈顕微鏡所見では、すべてデスメ膜レベルの変化で、polymorphous opacity, group of vesicles が特徴的である。常染色体優性で、両側性、胎生期での変化とされ、通常非進行性である病理組織学的には、デスメ膜の posterior layer の未熟性、異常内皮細胞 (epithelial like cell) の存在が重要である。角膜浮腫をおこし、重症例では角膜移植に到った例も報告されているが、今回の3症例には、上皮や実質に変化は認められなかった。しかし、内皮細胞の経過は、今後も追っていく必要があると思われる。

7. Mycoplasma pneumoniae 抗体価の上昇を認めた acute polyradiculoneuritis の1例

(神経内科)

○北村 英子・今城 俊浩・山根 清美・
太田 宏平・星野 守利・大澤美貴雄・
小林 逸郎・竹宮 敏子・丸山 勝一

症例：24歳男性、主訴：四肢麻痺、上下肢のしびれ感、現病歴：57年10月8日頃より咳嗽出現したが発熱は認められなかった。1週間後より、足の力が入らず歩行時フラフラすることに気付き、上下肢遠位部のしびれ感も認めた。上下肢脱力は次第に増強、四肢麻痺の状態となり10月23日入院となった。

入院時、呼吸はやや浅く、軽度顔面神経麻痺を認めた。筋力は上肢で1~3/5下肢で1~2/5であり反射は著

明に低下していた。

一般検査では異常なく、髄液ではタンパク細胞解離を認め、末梢神経伝導速度は低下、筋電図では神経原性変化を認めた。SEPは症状の改善とともに回復を認めた。肺機能検査は拘束性障害を認めた。ウイルス検査にて血清マイコプラズマ抗体価は128倍と上昇していた。入院後プレドニン60mg/日投与し、漸減し、臨床症状は改善した。58年3月31日退院時、なお、上肢遠位部の筋力は2であり腱反射は消失したままであったが、マイコプラズマ抗体価は4倍以下と正常化した。

まとめ：

(1) 血清マイコプラズマ抗体価の上昇した polyradiculoneuritis の1例を報告した。

(2) 本症例はいわゆる Guillain-Barré 症候群に含めるよりもマイコプラズマ感染による polyradiculoneuritis とするのが適切であると考えた。

(3) 種々の電気生理検査による経時的検索を行ない、その意義を検討した。

質問

(座長) 吉岡守正会長

Mycoplasma の先行感染があったということはどのように証明したのか？

菌の検索はしたのか？

咳嗽があっただけで Mycoplasma の先行感染があったといえるのか？

Mycoplasma orale の抗体価が上昇するというのではない。

応答

(神経内科) 北村 英子

本例は多発性根神経炎の経過に一致して、マイコプラズマ抗体価の上昇、低下を認めたのでマイコプラズマ感染に基づく多発性根神経炎と考えた。また寒冷凝集素価の上昇もそれを裏付けるものである。

麻疹については小児期に罹患があり、今回臨床症状も認めなかったので麻疹に基づくものとは考えにくい。麻疹抗体価の上昇は、マイコプラズマ感染に伴って生じた非特異的免疫反応と考えた。マイコプラズマ培養は行っていない。

追加

(リウマチ・痛風センター) 鎌谷 直之

SLE など polyclonal に抗体産生細胞が活性化される時は各種ウイルス等に対する抗体価が上昇することがわかっている。この症例でも Mycoplasma pneumoniae に対する抗体のみが specific に上昇していることを示すと、さらに因果関係が明らかになると思う。

8. 外傷性気管離断の1治療例